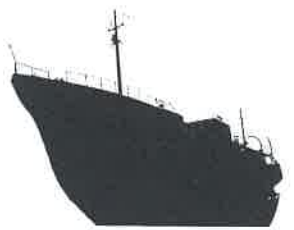


特別号 福竜丸だより

No.301 2003.08



発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 第五福竜丸展示館内 〒136-0081

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

ビキニ水爆実験・第五福竜丸被災50周年記念プロジェクト



第五福竜丸の船首・2003

特別企画：岡本敏子さんに聞く 岡本太郎とビキニ事件

岡本太郎さんは、いうまでもなく現代の代表的な画家、彫刻家、著述家、多様なジャンルのアーティストでした（一九九六年一月、八四歳で逝去）。その太郎さんが、原水爆に衝撃を感じ、ビキニ事件に心をとめ、第五福竜丸を描いた作品があります。大作「燃える人」は、福竜丸被災の翌年一九五五年の作品です。一九六八年のメキシコ、オテル・テ・メヒコの壁画「明日の神話」もまた、船に第五福竜丸が描かれています。この絵の福竜丸はマグロを引っぱっています。

（インタビュー2めん）



岡本太郎（人形）と敏子さん

第五福竜丸平和協会
二〇〇四年・被災50周年にむけ
記念プロジェクトよびかけ

（よびかけ文4めん）

「福竜丸だより」が通巻301号となりました。「ビキニ水爆実験・第五福竜丸被災50周年記念プロジェクト」のスタートにあわせて、記念特別号としました。なお、本号から判型A4判として刊行することにいたしました。ひきつづきのご協力をお願いする次第です。

（編集部）



(メキシコにある壁画は左右30メートル)

提供・川崎市 岡本太郎美術館 / 「明日の神話」 岡本太郎

特別企画

岡本敏子さん

一九二六年千葉県に生まれる。東京女子大在学中に岡本太郎に出会い、卒業後秘書となる。後年養女となり、太郎没後は、岡本太郎現代芸術振興財団理事長に就任。岡本太郎記念館館長。おもな著書に「岡本太郎が、いる」(岡本太郎に「乾杯」、編者「岡本太郎が撮った「日本」」)、「岡本太郎の沖繩」(「芸術は爆発だ!」岡本太郎痛快語録)など。

岡本太郎さんと原水爆

山村 一九五九年の八月一日から六日まで、第五回原水爆禁止世界大会記念行事として、「日本人の記録展」が広島市朝日会館で開かれました。この展覧会に岡本先生は「燃える人」を出品されています。展覧会は美術評論家の瀬木慎一さん、写真評論家の重森弘滝さんなどの企画で準備されたものでした。展覧会にあわせて中国新聞社ホールで、岡本先生と土門拳先生の記念講演も行われています。

岡本敏子 「燃える人」は、毎日国際展にピカンが「ゲルニカ」を出すという話が伝わってきて、それなら、といって描いたものです。いかなれば太郎の「ゲルニカ」ですよ。

太郎さんは、原爆については「私の現代芸術」に書いています。みな原爆の悲惨な状況を真っ先にいいますけれど、太郎さんは少し違うの。被爆者の方の記録を引用してこう書いています。

「(蜂谷道彦『ヒロシマ日記』より)——原子雲を見た広島の人々の素朴な言葉——あの時は、大きな雲がむくむくとあがって、その両脇へ金屏風を広げるように、何ともいえぬ綺麗な雲が広がってゆくんです。あの赤とも黄ともいえぬ綺麗な雲は何ともいえぬ綺麗でしたよ。」

広島の上へ大きな扇を拡げるように順々に拡がって行きましたよ。快晴の空に、

キチンと線を引いたように切れ、それが……。つづけて、太郎さんはこう記しています。

「誇らしい、猛烈なエネルギーの爆発・夢幻のような美しさ。だが、その時、逆同じ力でその直下に、不幸と屈辱が真黒くえぐられた。」

あの瞬間は、象徴としてわれわれの肉体のうちにヤキツイている。過去の事件としてではなく、純粹に、激しく、あの瞬間はわれわれの中に爆発しつづけている。

原爆が美しく、残酷なら、それに対応し、のりこえて新たに切りひらく運命、そのエネルギーはそれだけ猛烈で、新鮮でなければならぬ。でなければ原爆はただ災難だった、落とされればなし、ということになってしまふ。」

人間としての怒り

敏子 太郎さんのなかで、本当に、原爆もビキニ事件もまがましいこととしてとらえられていて、それに負けない「燃える人」を描いたと思うんです。

山村 ここに一九五九年作成の日本原水協のパンフレットに太郎さんが提供してくださった第五福竜丸の絵があります(右下)。

敏子 これは、「燃える人」の下絵のようね。この船のことがとても印象的だったのね。この絵の原画はどこへいっちゃ

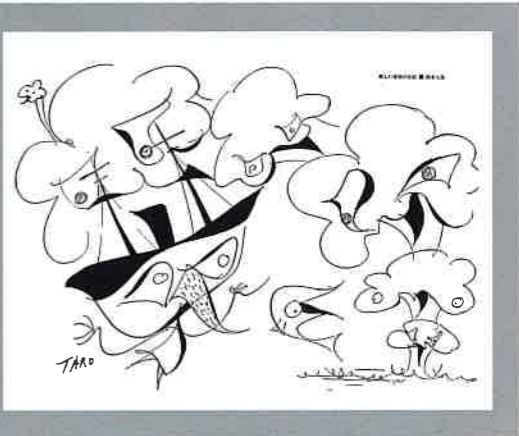
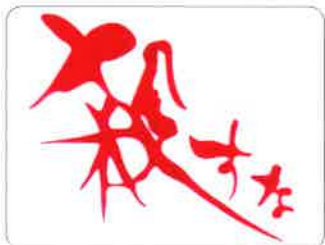
殺すな

敏子 いま、イラクのことが大変ですけど、三月二一日の反戦のデモに行った人が、その帰りにここに寄ってくださり、「殺すな」のプラカードを持ってこられたので置いていってくださるように頼んだの。

それを入り口にかけてありますが、これは、ベトナム戦争の時にベ平連がワシントンポストに意見広告をだすというので、太郎さんが描いた文字なの。とてもインパクトがあるでしょ。漢字なんだけれどアメリカでも大変な話題になったんですよ。いま、榎木野衣さんやラダマサノリさんたちが中心になってこの文字を使ってホームページでよびかけてるんですけど。デモは三〇〇人も集まったんですよ。

*

福竜丸事件の前年にこのアトリエを建てて移り、現代芸術講座とか現代芸術の会をやって、若い人たちがわいわい集まってきたので、アトリエの一室を提供して、そこでニュースを出したりいろんなことをやっていました。そして六〇年安保の問題がおこってきて、学生や労働組合の人たちは、組織とかあるけれど、まったくの個人は行くところがない。現代芸術の会の中にお嬢さんがね、「声なき声の会」というのを作ったの。そう、小林トミさん、このあいだ亡くなってしまっ



パンフレットに描かれた第五福竜丸「新しい怪物の世紀」

たけれど……。これは、岸信介(首相)が、安保に反対する人たちにむかって、「あの連中はわいわい声を上げていて、自分にはたくさん声なき声の方が」というようなことをいってたんですよ。

それを逆手にとってね、「声なき声の会」というプラカードをこさえて歩き出したの。そうしたら、まわりにどんどん人が集まってきたのね。

その人たちはいまだにつながっている。こういう風に、個人個人、自分の気持ちで行動することが大切よ。

太郎さんも、あらゆる運動が自立して、目的に向かっていくときに、必然的に一緒になると考えていたので、もたれあったり寄りかかったりすることは力にはならない、という信念を貫いていましたね。

福竜丸をよみがえらせる

敏子 福竜丸事件からもう五〇年ですか。早いですがね。忘れちゃこまりますよ。いま実際に戦争やってるわけだし、罪もない、関係ない人が、突然犠牲になったりする。福竜丸だって何の関係もないのに、突然、漁師たちが死の灰をあびた。しかも、その後も実験をつづけて島の人たちもすいぶん被害を受けてるんですよ。ね。

被災五〇年は大事な年よ。みんなの心にクサビを打たないとね。死の灰とか放射能の雨とか、あのころは本当に皮膚感覚でみんなが感じたのね。いまテレビで連日戦争が映し出されるけれど、なんだかゲームか囲碁の解説聞いているような感覚になってますよ。

若い兵士だってかわいそうよ。人間どこに属しようと、みな人間なんだ、という感性がなければいけません。どこにいようと、福竜丸と同じように死の灰をあびてしまふ。現にあびているかもしれない

のですから。

ビキニ事件の五〇年に「第五福竜丸をよみがえらせる」、そういう皮膚感覚をみんなに持ってもらうような企画をつくりだしてほしいわね。広くまき込んで、気になって加担せずにはいられないというような、昔のことではなく今のこととしてね(四月三日談)。

*

太郎さんは、「私の現代芸術」のなかで次のようにも述べています。「傷害を受けた人だけが被爆者なのだろうか。この原爆の事実から、われわれの運命の大きな部分が発している。つまりわれわれ自身が被爆者なのだ。それなのに、他人事のようにケロツとして見物側にまわっている。」

キノコ雲も見なかったし、火傷もしなかった、そして現在、生活をたくましくうち出し、新しい日本の現実を作りあげる情熱と力をもった日本人、その生きる意志の中にこそ、あの瞬間が爆発しつづけなければならぬのだ。

……私なら、爆心地に、何もない、空の空間を作る。作るべきだ。……たとえ白砂だけの、なんにもないひろがり。それはあの瞬間に、ごっそり、えぐりとられた象徴でもある。そしてあの爆発とは、何かを、空に向かって一人一人が問い、考え、自分自身を再認識する場所にするのである。」

——記念館の入り口に太郎さんの描いた鯉のぼりが上げられていました。その鮮やかな色彩は、第五福竜丸展示館前のひろばで、海風にそよぎ、緑の芝と青空に映えて美しいに違いありません。五〇周年に、ぜひ太郎さんの鯉のぼりを福竜丸とともに泳がせたい、そんな想いを抱いて記念館を後にしました。

* 「燃える人」は東京国立近代美術館で、「明日の神話」の原画は川崎市・岡本太郎美術館で見ることができます。
* 川崎市・岡本太郎美術館で開催される「ことばがひろく 岡本太郎展」(7/19~9/23)には、「明日の神話」が展示公開されます。

50周年記念プロジェクトの よびかけ

財団法人 第五福竜丸平和協会

2004年3月1日は、第五福竜丸が太平洋ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験で被災してから50周年に当たります。

この船は、和歌山県でカツオ漁船として建造され、後にマグロ漁船に改造されて船名を「第五福竜丸」と改め、遠洋漁業に従事していました。

1954年の第五福竜丸のビキニ水爆実験による被災は、核兵器開発競争の幕開けの時期に起こりました。

この一木造小漁船が遭遇した悲劇は、放射能による地球環境全体に及ぶ汚染被害、さらに、万一、核兵器が戦争で大量に使用されるならば、人類の絶滅さえもたらしかねないという危険を、初めて、全世界の人々の前に示し、警鐘を鳴らしました。

広島・長崎の被爆体験をもつ日本国民の間から、原水爆禁止の世論がまきおこり、それは世界へと伝播し、国際的な潮流を形成するにいたりました。また、バートランド・ラッセル、アルバート・アインシュタインをはじめ人類最高の英知による平和への探求もなされました。しかし、戦争も核兵器もない世界を希求する努力が行われてきたにもかかわらず、人類はいまだに核の脅威から解放されてはいません。

日本が受けた水爆実験の被害についても、その全容が必ずしも明らかにされたとはいえません。マーシャル諸島の人々をはじめ世界における、核兵器開発と核実験による被害、被害者の苦しみは、いまでも続いています。

保存運動が実り、第五福竜丸は、現在、東京・夢の島の都立第五福竜丸展示館に、船体の実物が丸ごと、展示されています。その時代に活躍をした木造漁船が、このような形で保存されているところは他にはないので、漁業の実際や社会・歴史を学ぶ資料としても貴重です。

年間十数万人の来館者、とくに、その多数を占める小・中・高校生たちに、第五福竜丸は、「原水爆の被害を繰り返してはならない。核兵器のない未来へ」のメッセージを発信し続けています。

核問題は、21世紀に入った今日においても、今この瞬間も、目の離せない問題です。



第五福竜丸の船尾

このような中で、ビキニ事件50周年を迎えるということは意義深いものがあります。改めて、核兵器問題を世界の人々の前にクローズアップさせ、次の50年への間違いのない方向づけを行う機会としなければなりません。

第五福竜丸平和協会は、第五福竜丸の保存を実現し展示館開館後その管理運営を担ってきた財団法人として、50周年を記念して、改めて事件の持つ現代的意義について、とりわけ展示館を訪れる若い新しい世代とともに考えてまいります。

第五福竜丸は航海中です。

原水爆のない未来の創造に寄与するために、このプロジェクトへのご賛同ご参加をよびかけるものです。

2003年6月

50周年記念プロジェクト企画案

(2004年2月より2005年1月まで以下の事業をすすめます)

- *第五福竜丸展示館の常設展示を、事件を知らない若い世代にもわかりやすくビジュアルにリニューアルします。第五福竜丸とそのほかの被災船に関する資料の収集、体験者の証言記録などをすすめます。
- *特別展の開催。「ビキニ事件見る知る感じる」「マーシャル諸島の被曝者」「現代アート展」などをおこないます。ビキニ事件に関する巡回展を検討します。
- *記念出版として「都立第五福竜丸展示館・図録」を発行します。
- *記念シンポジウムを、ビキニ事件に関連する諸分野の専門家、学会などの協力を得て開催します。
- *船体保存のための調査や展示館の施設の拡充・学習室の併設などにとりくみます。記念事業をすすめるための募金の取り組みをすすめます。